

第10章 世帯とライフコースからみた家と直系家族

平井 晶子（神戸大学）

【要旨】

家とは何か、どこから来て、どこへ行くのか。歴史人口学と家族史の融合は伝統家族である家の構造をとらえ、その変化を明らかにすることを可能にする。そして世帯とライフコースを軸に行われた歴史人口学的研究により、近代国家の成立を待たず日本社会には家的な家族が広く形成されていたこと、3つの類型で把握される人口家族構造が幕末にかけてその地域差を縮減させてきたこと、つまり家的な家族が上からの近代化に先駆けて各地の村落社会に浸透した可能性を見いだした。

また、ユーラシア的視野から直系家族の比較をすることで直系家族にもサブシステムがあり、しかもそれぞれが柔軟に運用されるシステムであることが示された。家的直系家族と隠居家族的直系家族というサブシステムに着目することで日欧双方の家族の地域性ならびに対比関係が明らかになった。

今後の課題は、近世末に生じた家族変動、社会変動をより立体的に描き出し、その延長にある近代以降の家族変動と接合することである。また歴史人口学的比較の視野をアジアに広げることである。

キーワード 世帯、ライフコース、家の変容、直系家族、相続、人口家族構造の地域性

はじめに

家とは何か、どこから来て、どこへ行くのか。歴史人口学と家族史の融合は伝統家族である家の構造をとらえ、その変化を明らかにすることを可能にする。

家族は、構成員の誕生や死亡、結婚といったメンバーの移動により容易に形を変える。そのため、ある時点の家族の記述だけでは家族の構造は見えてこない。とりわけ直系家族という世代をこえて継承される複雑な家族を見ようとすればスナップショットではとらえられない。世帯を継続的に追跡し、出生や死亡、結婚（離婚）や離家、戸主変更（継承）など、様々なライフコースを複合的に観察することでようやくその構造が見えてくる（世帯構造と継承については本報告書第9章参照）。

「世帯とライフコースからみた家と直系家族」と題する本章では、歴史人口学的方法を用いた世帯とライフコースの定量分析から見えてきた日本の家の特徴について、またユーラシア的視点から直系家族概念を用いることでみえてくる日本の家について、おもに2000年以降の成果を軸に検討する。

21世紀の歴史人口学はどのように家をとらえなおし、日本の家理解を刷新したのか。また直系家族という比較可能な概念を用いることで、さらには世界史的視野から日本の家をとらえ直すことで何がみえてくるのか、その成果と課題を検討する。

1. 世帯とライフコースからみた日本の家

1.1 社会学的家研究

社会学における日本の家はおもに3つの観点から論じられてきた。有賀喜左衛門に代表される「経営体としての家」、鈴木榮太郎の「直系家族としての家」、戸田貞三や喜多野清一による「家父長的家族としての家」である。これら3つの家論については、ちがいが強調され、対立する議論と考えられてきたが、いずれの議論においても基本となる家認識そのものは共通している。すなわち、家は(1)永続性、(2)家業・家産の維持、(3)単独相続、(4)直系家族世帯を希求するものと考えられていた。従来の家論をこのように整理した平井晶子(2008)は、このような家がいつから、いかにして確立したのかを世帯とライフコースから検討し、東北農村では19世紀中葉までに家らしい家が確立したとの結論を得た(詳細は1.3)。

1.2 村落における家の確立：畿内農村

社会学的家研究では何が家を家たらしめていたのかに力点が置かれ、いつ、いかなる状況下で家が成立し、普及していったのかはあまり考慮されてこなかった。近代化が進む渦中において、欧米家族（夫婦中心の家族）との対比を念頭に「日本の」基層構造を解明することが暗黙の課題となっていたからである。

そんななか法制史家である大竹秀男（[1962]1982）は、18世紀前半に畿内農村について家が

一般化するメカニズムを示した。はじめから永続的で単独相続を行う家があったわけではなく、分家が一般的な社会が、18世紀になり物理的な新田開発が限界に達すると、増え続ける村落人口との調整（経済と人口のバランス）のために、単独相続による家の継承が一般化したことを見いだした。限られた資源のなかで暮らすための人々の生存戦略が永続する家を生み出したのである。同時に、人々の合理的選択は、納税義務を滞りなく遂行させたい為政者にとっても好都合であり、分地制限令という法的対応とも連動し、いっそう広く普及したと説明する。

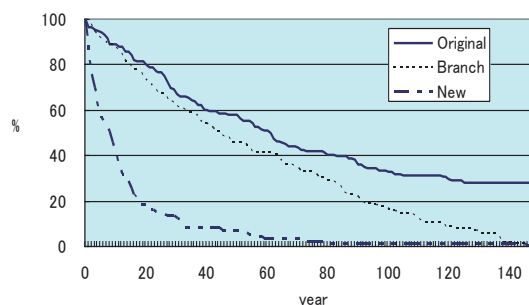
1.3 村落における家の確立：東北農村

畿内とは対照的に18世紀後半に人口減少を経験した東北地方では何が家を生み出したのか。平井は享保5(1720)年から明治3(1870)年までの151年間ほぼ連続する(欠年5年)陸奥国安達郡仁井田村(現、本宮市)の戸別改帳を資料に、世帯とライフコースを分析し、18世紀前半の仁井田村では誕生と消滅を繰り返す不安定な世帯が多かったが、19世紀中葉までに(誕生する世帯も絶家する世帯も減少し)安定した永続する家が一般化したことを見いだした(平井 2008, Hirai forthcoming)。150年という長期間の観察を活かし、世帯の永続性、家産の継承、家産の維持、世帯構造など、世帯の特徴を時代ごとに定量化することで世帯の変化を可視化した。また、個人のライフコースを追跡し、この世帯の変化がライフコースの変化の結果と連動する一連の変化であることも見いだした。すなわち永続する家が一般化する前は、性別や出生順位によりライフコースは固定されていなかったが、19世紀になり安定した家を実現するようになると、長男が生家の継承者、次三男が他家の継承者(養子として)というように家を継承するためのライフコースパターンが固定化した。

畿内とは動機も状況も異なるものの、東北では人口減少に直面した人々が生き残るための生存戦略として代々続く家を求め、それを実現するための“工夫”をこらした様子が浮かび上がる。それが出生順位別にライフコースを固定する再配分メカニズムの構築であった。

また、安定した家の運営に際しては固定した家成員が必要となり、離婚可能な期間も短縮された。もともと東北農村は早婚で離婚が多い(黒須 2012)。10代で結婚するが、20代でも、30代でも離婚が可能であった。嫁入りであれ、婿取りであれ、結婚の3割が離婚で終わる。そして離婚後は速やかに再婚する。ところが、安

定した家の確立期になると高い離婚率を維持しつつも、離婚するなら5年以内という制限が立ち現れた(平井 2008)。安定した世帯の運営には結婚のお試し期間を残しつつ、一定期間で固定したメンバー構成になることが求められたからである。安定した家、永続する家は、家の存続にふさわしいライフコースを実現させることで達成された。



Note: Original households are those that existed in 1720, the first year of observation. Branch households are those established after 1720 by village members. Newcomer households are those established by immigrants to the village after 1720.

出所: Hirai forthcoming, Figure 1-3

Figure 1. Household life expectancy in Niita by household type, 1720-1870

このプロセスをデータで確認しておこう。Figure 1は観察の全期間における世帯の生存率(世帯生命表:観察開始からの時間の経過のなかでどれだけの世帯が存続しているか)を示している。分家(Branch)や新しく創設された世帯(New)はもちろん、観察開始時点から存在していた世帯(Original)でも50年間続くのは6割である。世帯の永続性ははじめから備わっていたわけではない。

ところが、永続性は時代が下るにつれて強化される(Table 1.)。それぞれの時点で観察できる世帯が何年存続しているのかを求め、存続期間が「50年以上」の世帯の、全世帯に占める割合を求めたところ、「50年以上」の世帯割合は徐々に増えている。しかも村内生まれの人の世帯(Native)だけではなく、転入者により創設された世帯(New)でも同じ傾向がみられる。

では、いかにして世帯は永続性を獲得していたのか。18世紀は分家がしばしば見られたが、19世紀になるとあととりは生家を、あととり以外は他家を継承する存在へと変化した。つまり生家からみて「余った」子どもは他家のあととりになるというライフコースのパターンが確立した(Table 2.)。

Table 3は、それぞれの世帯の30年後の運命

を示している。18世紀は最後の一人が死亡（Extinguished）したり，嫁に行ったり（Abandoned）して世帯が消滅に至るケースが散見された。ところが19世紀になると最後の一人は離家ではなく，婿や嫁，養子を迎えることで絶家を回避する。もしくは最後の一人が死亡する前にあととりを迎え入れ，絶家を回避している。絶家を回避するため，村の子どもたちを再配分し，家の永続性を実現させたのである。

Table 1. Households surviving for more than 50 years by household type in Niita, 1770-1870

	Native	New	Total
1770	60.3%	0.0%	54.3%
1780	57.0%	5.9%	50.7%
1790	63.3%	11.1%	55.9%
1800	72.7%	13.3%	64.9%
1810	72.7%	13.3%	64.9%
1820	72.6%	8.3%	65.4%
1830	73.1%	14.3%	69.0%
1840	78.7%	40.0%	76.6%
1850	78.8%	50.0%	76.9%
1860	82.6%	40.0%	80.2%
1870	87.1%	40.0%	84.4%
Total/ Average	72.6%	21.5%	67.8%

Note: Percentages based on the total number of households existing in each year. Native households consist of original households that existed in 1720 and branch households established by village members after 1720. Newcomer households were set up by immigrants after 1720.

出所：Hirai forthcoming, Table1.3

Table 2. Reasons for leaving home by younger sons (N=120)

Birth year	son-in-law	adoption	branching	service	other
1720-49	23.5%	8.8%	47.1%	11.8%	8.8%
1750-79	36.1%	13.9%	22.2%	19.4%	8.3%
1780-09	35.0%	15.0%	15.0%	20.0%	15.0%
1810-39	50.0%	26.7%	3.3%	20.0%	0.0%

Note: 18th century: Birth cohorts are for the period 1720-1779, so leaving home occurred mainly in the 18th century. 19th century: Birth cohorts are for the period 1780-1839, so leaving home occurred mainly in the 19th century.

出所：Hirai forthcoming, Table1.8

Table 3. Fate of households within 30 years by household type, in Niita, 1720-1870

3.1 Native Households (original and branch households)					
	1720	1750	1780	1810	1840
	↓	↓	↓	↓	↓
	1750	1780	1810	1840	1870
Continuous	66.7%	75.4%	67.8%	77.8%	92.1%
Abandoned	20.5%	10.2%	10.2%	4.0%	0.0%
Extinguished	10.6%	10.2%	16.1%	15.2%	4.5%
Missing	1.5%	0.9%	2.5%	2.0%	1.1%
Migration	0.8%	3.4%	3.4%	1.0%	2.3%
Total	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

3.2 Newcomer Households (established households by immigrants)					
	1720	1750	1780	1810	1840
	↓	↓	↓	↓	↓
	1750	1780	1810	1840	1870
Continuous	-	40.0%	14.3%	20.0%	60.0%
Abandoned	-	20.0%	42.9%	6.7%	0.0%
Extinguished	-	30.0%	7.1%	40.0%	20.0%
Missing	-	0.0%	28.6%	13.3%	0.0%
Migration	-	10.0%	7.1%	20.0%	20.0%
Total	-	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

Note: Classification adapted from Wall (2002). 'Abandoned' indicates that the last remaining member of a household married out, went into live with relatives, or moved into lodgings, while 'extinguished' means that the last remaining person died before leaving the household.

出所：Hirai forthcoming, Table1.5

1.4 家の成立と徳川体制からの人口学的離陸

この家族に起きた変化は何を意味するのか。

日本の人口転換は近代に入ってからであるが，家族の変化がそれ以前に顕著なことは，近代に先駆けて社会の基層において変化が始まっていたことの現れではないだろうか。

鬼頭宏（2000）は1万年というスパンで日本の人口変動を俯瞰し，1840年頃からはじまる第四の波，すなわち人口増加の端緒を見いだした。2000年代まで続く急激な人口増加の波は，明治維新を待つことも，本格的な工業化・産業化を待つこともなく，1840年頃から始まっていた。落合恵美子は近世末のこの変化を「徳川体制からの人口学的離陸」（落合 1994：425）と呼ぶ。そして墮胎・間引きを忌避する心性の登場が人口増加を後押しした可能性に言及する。蘭学を通して西欧的胎児観や生命観が当時の社会に影

響をおよぼし、人口増加を下支えしたと考えた。

幕末の人口増加を生み出す背後には、心性の変化に加えて、家族にも変化がみられた。畿内で 18 世紀に確立した家が、東北では 19 世紀に確立したように (平井 2016)、地域によるちがいをこえた動きが起きていた。

西南日本の海村を歴史人口学的に分析した中島満大 (2016, 2017) は近世末にみられた結婚年齢の標準化から「地域性の縮減」を指摘する (本報告書 第 11 章)。初婚年齢には地域差があり、東日本は比較的早婚で、西日本が晩婚であることは早くから指摘されていた (速水 1986=2009)。近世の村単位の分析からも近代の統計資料からも結婚年齢の西高東低の傾向はよく知られている。中島は幕末にかけて早婚の東北地域で初婚が遅くなり、晩婚の中央・西南地域で初婚が早まり、徐々に標準化する動きが始まっていたことを見いだした。

もともと日本の人口家族構造には大きな地域差がみられた。ところが、近世末にその人口家族構造の地域差が縮減し、家的なものへと収斂する。そして人口増加が明治維新に先駆けて始まった。つまり、近世末から近代化への大きな地殻変動が始まっていた、これが世帯とライフコース研究からみえてきた仮説である。(ここでは触れていないが) この時期までにプロト工業化の進展、換金作物の増加、識字率の上昇にとともなう情報・知識の共有など様々な変化が起きていた。18 世紀末の寒冷期からの回復といった自然環境の恩恵もあるかもしれない。それらの様々なエネルギーがプールされ、近代へ向けたマグマが動きだしたのではないか。

1.5 日本の人口家族構造の 3 類型の展開

ここでは家の変容との関連から幕末の推移を述べたが、もともと人口家族構造の地域類型論を打ち立てたのは速水融 (2009) である。速水 (速水 2009 : 567, 表 20-1) は、日本の家族構造は少なくとも 3 つに分類できると考えた。東北日本型・中央日本型・西南日本型 (東シナ海沿岸部) である。生態系や生産力、人類学的特性も念頭に入れつつ検討し、家族・人口特性を (世帯規模 : 大 or 小, 初婚年齢 : 低 or 高, 出生数 : 少 or 多など)、「低/少/小」「高/多/大」といった相対的特徴でとらえた。

落合は、速水の示した大きな見取り図をベースに、家族史と歴史人口学を融合する共同研究の成果を積み上げ (落合編 2006, 落合編 2015)、3 類型の特徴に実際の人口指標を入れ、人口家族構造の 3 類型を精緻化した (落合 2015a : 27, 表序-3)。

さらに、前項で述べたように地域差の大きい近世的構造が近世末に変化していた。この下からの近代への胎動を日本型家族モデルの形成として析出した。この流れを包括的に打ち出したのが落合と平井が編集した *Japanizing Japanese Families : Regional Diversity and the Emergence of a National Model through the Eyes of Historical Demography* (Ochiai and Hirai eds. forthcoming) であり、その序論 (Ochiai forthcoming) である。

人口家族構造の変容という地殻変動が近代日本を駆動したひとつのエンジンだとすれば、そのエネルギーはいかにして蓄えられ、発動することとなったのか。近世末に起きた徳川体制からの人口学的離陸の諸要素について、各地で何が起きていたのか、さらに多角的な検討を進め、具体像を明らかにすることが求められる。

2. 世界史的視野からみる日本の家

2.1 家と直系家族

日本の家は世界史的視野からみるとどのよう

に位置づけられるのか。1998 年以降、落合はアントワネット・フォーヴ・シャム (Antoinette Fauve-Chamoux) とともに直系家族をめぐる 3 度の国際シンポジウムを開催し、その成果を 2 冊の本と 1 冊のプロシーディングスにまとめた²⁾。

まずは、この比較研究を主導した二人の興味深い指摘に注目する。

ひとつは、直系家族の一形態として家をとらえることに躊躇する態度は日本に限ったことではないという落合 (2015b) の指摘である。日本の「家」は日本固有の伝統を有するものであり、他国の家族とは比較できないといわれ、直系家族としての議論にブレーキがかかった歴史がある。この「家=固有の伝統、よって比較不可能」という論理は、「遅れてきた」近代のひとつの反応であり、スペインなどヨーロッパの周辺でも使われるロジックであるという。そうであるなら、コンプレックスから幾分解放された現段階において、直系家族という共通の枠を用いる比較研究を妨げるものは何もないのではないか。「固有の伝統」が再び注目される現代だからこそ、改めて伝統の内実を冷静にみることを求められる。

もうひとつは、ピレネーの家社会を長年見続けてきたフォーヴ・シャムによる「直系家族とは実に特殊で柔軟なシステムである」という指摘である (フォーヴ・シャム 2009 : 34)。世代をこえて代々つないでいくことにフォーカス

するため、「だれが」「いかに」継承するかは柔軟に対応せざるをえない。家という言葉から私たちは堅い構造を想像しがちであるが、堅いシステムであれば継続がむつかしい。柔軟さこそ肝要という。また、柔軟さの具体例として「非均分相続」、「女性に有利なある種の双系性」を家の特徴とみなす。均分相続を明文化したナポレオン法典を有するフランス故に均分でないことに目が向かうのかもしれないが、「単独」に意味があるのではなく、「均分」であるべきとの規範がないことの意義を語る。さらには継承者が「男性」や「父系」であるべきとの圧力がないことを、「双系」と読み替え、女性に有利なシステムと解釈する。日本でもピレネー地方と同じような実態はよく知られているが、(筆者も含め)「単独相続」や、「婿養子/養子/非親族の多さ」として描き出してきた。婿養子による継承が多いことを「双系」や女性に有利なシステムととらえ直す点を、今一度考える必要があるだろう。

家の何を、どうみるのか。各地の直系家族研究を学ぶことで視界が開ける。社会ごとに「比べる対象」がちがうため、同じ家(直系家族)を扱っても別の見方で考察されるからである。夫婦家族と比較するのか、合同家族との比較なのか、父系社会なのか、比較の軸はひとつではない。よって比較の軸を変えることで、何が家を家たらしめているのか、その新たな切り口が見えてくる。

日欧の直系家族の比較に限らず、他の直系家族がどのような非直系家族との対比において議論されているのか、さらなる検討が必要である。とりわけアジアとの比較が課題である。アジアでは歴史人口学的資料が十分に活用されていない地域もあれば、資料そのものが探索されていなかったり、歴史人口学的研究に着手されていなかったりする地域も少なくない。資料探索や分析可能性も含め、現地の研究者との新たな協働を模索する必要があると考える。

2.2 ヨーロッパにおける2つの直系家族

ヨーロッパの直系家族が多様であることはよく知られているが、この間のシンポジウムにより家的直系家族とそうでない直系家族の区別がより一層、明確になった(Fauve-Chamoux and Ochiai 2009, 落合 2015b)。

各地で積み上げられてきた歴史人口学的研究をもとに、共通(あるいは類似)の指標から世帯構造やライフコースが詳細に比較できるようになり、理念やイメージ、家族のスナップショットではなく、立体的な構造がみえてきたからである。

大別すると、ヨーロッパには、ピレネー地方やバスク地方で見られる「家(House, maison)」としての直系家族と、ミヒヤエル・ミッテラウアー(Michael Mitterauer)らが中欧で見いだした「隠居家族(Ausgendingefamilie)」としての直系家族がある。前者は「家」が中心にあり、その家に嫁や婿が入る直系家族であり、地域によっては屋号があつたり、初生子相続があつたりする。それに対して、後者は「ひとりの子どもが結婚後も親と同居」というライフコースパターンから見ると直系家族的構造を有するが、子どもが結婚すると同時に親は隠居し、主導権は子ども夫婦に移行する。比較的晩婚であり、二組の夫婦の同居期間は短い。

つまり、ヨーロッパの直系家族には少なくとも2つのサブシステム、家と隠居家族がある。家的直系家族と隠居家族では、直系家族といえども別のサブシステムとして理解する必要があるとの共通理解が示された。

このようにヨーロッパにおける2つの直系家族という図式が整理されたことで、日本の家を考える新たな比較の道がみえてきた。フォーヴ・シャムーの言葉にあるように、「家は柔軟で複雑」なため、どの観点で何を比較するかで、類似性を取りだしたり、異質性を見いだしたりすることになる。

2.3 日欧それぞれの2つの直系家族

ヨーロッパの2つの直系家族を念頭におくと、日本の家はどのようにとらえられるのか。

落合(2015b)は「日本における直系家族システムの二つの型—世界的視野における『家』」において、中央日本の事例と東北日本の事例について分析を行い、晩婚で、多核家族型の直系家族が少ない中央日本は中欧の隠居家族的な直系家族に近く、早婚で、多核家族型の直系家族が多い東北日本はピレネーの家的直系家族的特徴を示すと、ヨーロッパと日本の多様性を整理し、これまでの日本の直系家族に対する歴史人口学的理解を包括的にとらえ直した(表4)。

具体的には、それまでの比較研究が中欧タイプの隠居家族との比較であったこと、比較の結果、アーサー・ウルフ(Arthur Wolf)とスーザン・ハンレー(Susan Hanley)は類似性を強調し(Wolf and Hanley 1985)、ローレル・コーネル(Laurel Cornell)や斎藤修はちがいを重視してきた(Cornell 1987, Saito 1998)と整理する。そして両者のちがいは日本の家の地域性から説明できると説く。中欧の隠居家族とピレネー地方の家(maison)が違うように、日本の家

族も地域によりサブシステムがあり、それらが日欧比較の共通理解を妨げてきたと考えた。中央日本の家族は晩婚のため、結果として二組の夫婦の同居期間が短く多核直系家族は少ない。親が寡婦/寡夫となりそうな時期に子どもが結婚し同居を始めるからである。他方、東北日本は早婚であり、結果として親子の同居期間が長くなる。この結婚年齢や同居期間のちがいは、戸主年齢や高齢期の居住形態の違いなどライフコース全体に影響をおよぼすものであり、2つの直系家族として理解すべきものではないかと提案する。

表4 日欧それぞれの2つの直系家族システム

ヨーロッパ		日本
中欧 隠居家族的直系 家族	晩婚 多核直系家族：少 (二組の夫婦：少)	中央 中央日本型
ピレネー地方 家的直系家族	早婚 多核直系家族：多 (二組の夫婦：多)	東北 東北日本型

出所：落合（2015b）をもとに筆者が作成。

ヨーロッパの地域性と日本の地域性を対比させるのは大胆な発想にみえるかもしれないが、同様の発想は速水も共有するものであった。

速水は広く東シナ海からアジアを含む地域のなかに日本を置き、国境を越えた広がりの中で、その一部として日本の地域性を考えていた。エマニュエル・トッド（Emmanuel Todd）が国境を越えてヨーロッパの地域性を論じたように（Todd 1990=1992, 1993）、アジア諸地域のデータが扱えるならば、そうしたかったであろう。

それと同時に、速水は「極東の小さな島国・日本」という発想からも自由であった。2004年3月にケンブリッジ・グループにおいて日本の地域性に関する講演をおこなった際、速水は日本の地図とヨーロッパの地図を同じ縮尺にして重ね合わせるというところから議論を始めた。ヨーロッパの縦横の面的な広がり、日本のそれを対照し、いかに日本が地理的、生態学的多様性を含みうる地域であるかを示した。「小さな」日本に人口家族構造の3類型があるのではなく、多様な環境の日本だから3類型があることを説得的に論じていた。2枚の地図の重なりを示したことで、聴衆の日本および日本の地域性への認識が一気に変わった。今も、そのときの会場に生起した「驚き」と「納得」の空気が忘れられない。落合は、速水の「技」を見たわけではないが、同じ思いを共有し、ユーラシア・プロジェクトを牽引していたのではないだろうか。

ヨーロッパにおける歴史人口学が示した2つ

の直系家族、これらを参照軸とすることで、日本の2つの直系家族システムが立ちあらわれた。民俗学・社会学・民族学・地理学・言語学などさまざまな分野で日本の地域性は論じられてきた。そこに、初婚年齢のちがいが家族構成の差となり、二組の夫婦の同居を基本とする社会（東北）と二組の夫婦の同居を好まない社会（中央日本）とのちがいに象徴される、家族構造の類型論が加えられた。

3. ピレネー地方の家・東北日本の家

3.1 ピレネー地方のバロニー地域との比較

ピレネー地方の家と対比すべき対象が東北日本の家であることから、フォーヴ・シャムール（2009）は自らの研究対象であるピレネー地方のバロニー地域と東北日本の比較研究を展開した。

具体的には、戸主交代や女性戸主の割合・出現形態、婿や養子による継承などを実際の実証データをもとに比較し、50代で隠居し子ども夫婦に家督を譲る「ソフト」な継承、婿や養子による継承、女性が継承において重要な役割を担う点で、両者の直系家族がいかに同じ「家」的特徴をもつかを論じた。ただし、出生抑制への方策や人口変化への対応、社会の制度的変化への対応ではちがいがあること、また時代によって、同じピレネーでも日本でもちがいが生まれることを示した。

東北農村の分析をおこなった筆者から見ても、両地域の家には類似する要素が多い。ただし、本章第1節で論じたように東北日本では家が確立する前は不安定な家族が多く、絶家や分家が頻発していた。その点からみると、ピレネー地方の方が安定した家社会を長く維持していたといえるだろう。

またフォーヴ・シャムールも指摘しているように、限られた資源のなかで家を維持するには出生抑制が不可欠となる。バロニー地域では結婚できる人数をコントロールすることでそれを実現し、東北日本では夫婦の出生数をコントロールすることでそれを実現していた²⁾。この差は家や村からみると大きなちがいではないかもしれないが、当該社会に生きる個人にとっては大きかったであろう。そのちがいが、出生制限が緩和された近代以降のライフコースのちがいをもたらしたのではないだろうか。

3.2 ピレネー地方のバスク地域との比較

ピレネーのバスク地方を研究したフランスのマリー・ピエール・アリザバラガ（Marie-Pierre Arrizabalaga）は19世紀の大きな社会変動のな

かを生き抜いた 120 組の夫婦の家族復元を行い、急激な近代化のなかで（ナポレオン法典の制定、工業化、新大陸への移民の増加など）直系家族がいかなる変容を強いられたのか、人々がいかなる戦略で対応したのかを議論した（Arrizabalaga 1997, 2003）。家は限られた土地、資源のなかで人々が生きていくための「複雑で柔軟なシステム」であったが、近代化のなかで新大陸への離村者が増えるなど、家はより一層「柔軟な」対応を求められた。そして、女性相続が大幅に増えた。

平井（2009）は東北日本とアリザバラガのバスク研究をもとに変化のゆくえを比較し、ダイナミックな社会変動のなかの直系家族の変化をとらえる重要性を指摘した。時代はちがうが、近代化への対応のなか、バスク地域では女性相続が増えたのに対し、戦後の日本では女性の離村が増え、農村における男性の結婚難が問題化していた。

家は、成員の結婚や出産に介入することで、出生転換前の人口調整機能を担ってもいた。多産多死という社会のなかで家もっていた意味や機能は、少産少死社会に入ると自ずと変わる。家の特徴を考えるにあたり、人口転換以前の社会が家に込めた役割を理解し、その後の展開をみる必要があるのではないか。日本の家族変動についても長期的視野からの研究がなされているが（平井 2021）、さらなる展開が求められる。

4. 今後の課題

あらためて世帯やライフコースを軸とする歴史人口学的家研究の課題をまとめておこう。

ひとつは 19 世紀中葉に始まる日本の大きな社会変動について、より具体的な実証的成果を積み上げ、思想、経済、人口がどのように関連しながら近代への助走を始めたのか、より具体的な研究が求められる。

二つ目はピレネー地方との比較が新たな家研究の展開をもたらしたように、アジアの歴史人口学的家族史研究との比較は次なる展開を可能にするだろう。国境をこえたアジア地域における地域性の検討のためにも、直系家族の新たな比較の軸の構築のためにもアジアの歴史人口学との協働が求められる。

最後は歴史人口学的家研究を近代以降の家族研究と接合し、大きな変動論を構築することである。筆者自身もこれらの課題に取り組みたいと考える。

注

- (1) 1 度目は 1998 年に国際日本文化研究センターで開催された“The Stem Family in Eurasian Perspective: Revisiting House

Societies, 17th-20th Centuries”と題するシンポジウムである（Fauve-Chamoux and Ochiai eds. 2009）。2 度目は同センターで 2002 年に開催された“The Logic of Female Succession: Rethinking Patriarchy and Patrilineality in Global and Historical Perspective”である（Ochiai ed. 2003）。最後は 2004 年に京都大学で開催された比較家族史学会のシンポジウム「歴史人口学と比較家族史」である（落合・小島・八木編 2009）。

- (2) 出生性比のアンバランスを根拠に、夫婦の子ども数が調整されていたことが示されてきた（津谷 2001, 平井 2008）。

引用文献

- 大竹秀男, (1962)1982, 『封建社会の農民家族 (改定版)』, 創文社。
- 落合恵美子, 1994, 「近世末における間引きと出産」, 脇田晴子・スーザン・ハンレー編, 『ジェンダーの日本史』上巻, 東京大学出版会, 425-459 ページ。
- 落合恵美子, 2015a, 「徳川日本の家族と地域性研究の新展開」, 落合恵美子編, 『徳川日本の家族と地域性—歴史人口学との対話』, ミネルヴァ書房, 1-36 ページ。
- 落合恵美子, 2015b, 「日本における直系家族システムの二つの型—世界史的視野における『家』」, 落合恵美子編, 『徳川日本の家族と地域性—歴史人口学との対話』, ミネルヴァ書房, 279-314 ページ。
- 落合恵美子編, 2006, 『徳川日本のライフコース—歴史人口学との対話』, ミネルヴァ書房。
- 落合恵美子・小島宏・八木透編, 2009, 『歴史人口学と比較家族史』, 早稲田大学出版部。
- 落合恵美子編, 2015, 『徳川日本の家族と地域性—歴史人口学との対話』, ミネルヴァ書房。
- 鬼頭宏, 2000, 『人口から読む日本の歴史』, 講談社学術文庫。
- 黒須里美, 2012, 「婿取り婚と嫁入り婚」, 黒須里美編, 『歴史人口学からみた結婚・離婚・再婚』, 麗澤大学出版会, 57-79 ページ。
- 津谷典子, 2001, 「近世日本の出生レジーム—奥州二本松藩農村の人別改帳データのイベント・ヒストリー分析」, 速水融・鬼頭宏・友部謙一編, 『歴史人口学のフロンティア』, 東洋経済新報社, 219-244 ページ。
- 中島満大, 2016, 『近世西南海村の家族と地域性—歴史人口学から近代のはじまりを問う』, ミネルヴァ書房。
- 中島満大, 2017, 「近代移行期における西南日本型結婚パターンの変容」, 平井晶子・床谷文

- 雄・山田昌弘編, 『出会いと結婚』, 日本経済評論社, 291-316 ページ。
- 速水融, (1986) 2009, 「結婚年齢から見た複数の『日本』」, 『歴史人口学研究』, 藤原書店, 123-141 ページ。
- 速水融, 2009, 『歴史人口学研究』, 藤原書店。
- 平井晶子, 2008, 『日本の家族とライフコース—「家」生成の歴史社会学』, ミネルヴァ書房。
- 平井晶子, 2009, 「変容する直系家族—東北日本とピレネーの場合」, 落合恵美子・小島宏・八木透編, 『歴史人口学と比較家族史』, 早稲田大学出版部, 108-129 ページ。
- 平井晶子, 2016, 「近世後期における家の確立—東北農村と西南海村の事例」, 加藤彰彦・戸石七生・林研三編, 『家と共同性』, 日本経済評論社, 93-113 ページ。
- 平井晶子, 2021, 「三〇〇年からみる家族人口論序説」, 『社会学雑誌』, 第 38 号, 7 月, 6-19 ページ。
- フォーヴ・シャムー, アントワネット, 2009, 「家の継承—フランス中央ピレネー地方と東北日本の継承システム」(田中晴子訳), 落合恵美子・小島宏・八木透編, 『歴史人口学と比較家族史』, 早稲田大学出版部, 33-62 ページ。
- Arrizabalaga, Marie-Pierre, 1997, “The Stem Family in the French Basque Country: Sare in the Nineteenth Century”, *Journal of Family History*, 22(1), pp.50-69.
- Arrizabalaga, Marie-Pierre, 2003, “Female Primogeniture in the French Basque Country”, Ochiai, Emiko ed., *The Logic of Female Succession: Rethinking Patriarchy and Patrilineality in Global and Historical Perspective*, Kyoto, International Research Center for Japanese Studies, pp.31-52.
- Cornell, Laurel, 1987, “Hajnal and the Household in Asia”, *Journal of Family History*, 12, pp.143-162.
- Fauve-Chamoux, Antoinette, and Ochiai, Emiko, 2009, “Introduction”, Fauve-Chamoux, and Ochiai, eds., *The Stem Family in Eurasian Perspective: Revisiting House Societies, 17th-20th Centuries*, Bern, Peter Lang, pp.1-50.
- Fauve-Chamoux, Antoinette, and Ochiai, Emiko eds., 2009, *The Stem Family in Eurasian Perspective: Revisiting House Societies, 17th-20th Centuries*, Bern, Peter Lang.
- Hirai Shoko, (forthcoming), “Emergence of the *Ie* in North-eastern Japan 1720-1870”, Ochiai Emiko and Hirai Shoko eds., *Japanizing Japanese Families: Regional Diversity and the Emergence of a national Family Model through the Eyes of Historical Demography*, Bern, Brill.
- Ochiai, Emiko, (forthcoming), “Introduction: Regional Diversity and the emergence of a National Family Model at the Verge of Modernity”, Ochiai, Emiko and Hirai Shoko eds., *Japanizing Japanese Families: Regional Diversity and the Emergence of a national Family Model through the Eyes of Historical Demography*, Bern, Brill.
- Ochiai, Emiko ed., 2003, *The Logic of Female Succession: Rethinking Patriarchy and Patrilineality in Global and Historical Perspective*, (International Symposium 19, January 10-13, 2002), Kyoto, International Research Center for Japanese Studies.
- Ochiai, Emiko and Hirai, Shoko eds., (forthcoming), *Japanizing Japanese Families: Regional Diversity and the Emergence of a national Family Model through the Eyes of Historical Demography*, Bern, Brill.
- Saito Osamu, 1998, “Two Kinds of Stem Family System? Traditional Japan and Europe Compared”, *Continuity and Change*, 13-1, pp.167-186.
- Todd, Emmanuel, 1990, *L'invention de L'Europe*, Paris, Seuil, 石崎晴己他訳, 1992-93, 『新ヨーロッパ大全』I・II, 藤原書店。
- Wall, Richard, 2002, “The Impact on the Household of the Death of the Father in Simple and Stem Family Societies”, Renzo Derosas and Michael Oris, eds., *When Dad Died: Individual and Families Coping with Family System in Past Societies*, Bern, Peter Lang, pp.141-172.
- Wolf, Arthur, and Susan Hanley, 1985, “Introduction”, Hanley, Susan and Arthur Wolf eds., *Family and Population in East Asian History*, Stanford, Stanford University, pp.1-12.